

# 「6月23日の沖縄でアメリカ軍人を想う」

清見組 了因寺門徒 村瀬宏規

6月23日、ボクは沖縄の地にいました。ご存じの通りこの日は沖縄慰霊の日。旧日本軍の沖縄における組織的戦闘が終わった日といわれています。今年2025年は終戦80年の節目の年。ボクはこの日Kさんと二人で沖縄全戦没者追悼式に参列するために沖縄を訪れました。

Kさんはボクのご近所さんで、自給自足オーガニック農業に長年取り組んでおられます。ボクより一回りも年上ですが、気楽に飲んで語り合うことができる、ボクが今最も敬愛する大先輩なのです。Kさんの丹精したコメや野菜は絶品で、その白菜で作る豚のミルフィーユ鍋は調味料なしでも旨いのです。またKさんは真宗大谷派の僧籍を持たれた方で、大谷派が取り組む様々な社会問題にも関心を持って活動しておられますが、特にハンセン病差別問題には造詣が深く、ボクをその学びの場に導いてくれました。Kさんには感謝しかありません。

そんなKさんとボクが初めて沖縄を訪れたのは10年前の6月23日。戦後70年の年でした。その時は旧高山教務所で企画された「平和と人権の旅」に共に参加したのです。3泊4日の盛りだくさんの旅程には、ハンセン病療養所の沖縄愛楽園や辺野古基地移設現場など普通の観光ではとても行けない貴重な場所も入っていました。特にあのチビチリガマとシムクガマを何我寺（ぬーがじ）住職の知花昌一さんに案内していただいたことは貴重な経験となり、知らなかった沖縄の苦難の歴史に触れることができたのです。

そして今回の沖縄訪問。10年ぶり二度目の摩文仁の丘は、期待通りの陽射と蒸し暑

さでボクたちを迎えてくれました。Kさんの最大の目的は、追悼式で読まれる沖縄の児童の詩を生で聞くこと。毎年追悼式で読まれるこどもたちの詩は深く感銘を覚えるものでしたが、今年も穏やかに情緒深く朗読されたその詩はとても感動的で、Kさんの目には涙が溢れていました。不戦の誓いが沖縄ではしっかりと子どもたちに引き継がれていることを実感しました。

そしてボクにはもうひとつ、この摩文仁の丘で戦争に想いを馳せた場面がありました。平和の礎には、沖縄戦で亡くなったアメリカ兵の名前も刻まれています。国も人種も関係なく沖縄戦で命を落とされたすべての人々の名前が一人一人しっかりと刻まれているのです。アルファベットで刻銘れたその碑の前に、軍服ではなく軍の正装で整列し献花する大勢のアメリカ軍人の方々の姿がありました。軍のセレモニーとして行われていたであろうその場面にボクは偶然居合わせたのです。この人たちはどんな思いでここに立っておられるのだろう。ボクは引き寄せられるように軍人さんたちの顔が見える位置まで向かっていました。折しもその日の朝刊一面トップ記事は「米、イラン核施設空爆」だったのです。平和を祈る式典の場にいなければならなかった彼らは、あまりの間の悪さに忸怩たる思いであっただろうか。それとも“それが我が国アメリカの正義だ”と胸を張る思いであっただろうか。しかしその場にいたアメリカ軍人の方々の表情は一樣に神妙で、ともすれば弱弱しく、誰一人として勇ましい軍人のオーラを発しているような人はいませんでした。ボクにはそれは苦悩あるいは反省の表情にも見えたのです。職業軍人とはいえ、家族と離れ遠い東アジアの基地 OKINAWA に赴任している彼ら。ボクはそこにいた彼らに何かしらのシンパシーを感じ、妙に愛しく感じていたのです。この感情を説明する力量は今のボクにはありませんが、少なくとも怒りとか憎しみと

いう感情ではなかった。もし自分が彼らと同じ立場でそこに立ったらどう思っただろう？ 彼らだって絶対に戦いたくなんかない、人を殺したくない、自分も死にたくない、戦争なんて無くなってほしい、そう思っているに違いない。ボクはそう信じたかったのです。

今、本当に世界が混沌としています。世界の各地で争いや殺戮の連鎖が起き、異常気象で地球全体が悲鳴を上げています。世界中の次の世代のこどもたちが幸せに暮らせるように、今自分が何をしなければならないのか。それを考え、そして実行しなければならない時が来ていると、沖縄の海を見つめながら思った旅でした。